



野弧

芋焼酎のおっさん

曆ではそろそろ立冬を迎えようとする朔の夜、墨を流したような雲は星明かりをも遮り、日本橋界限は漆黒の闇に覆われていた。

江戸でも有数の廻船問屋『池田屋』の軒下、防火用に積まれた天水桶の脇で、漆黒の闇と同化したかのように気配を消す人影があった。

夜空を覆っていた雲が寸の間途切れ、星明りにぼんやりと浮かんだ人影は、鳶のような出立ちに黒い頬かむりをした若い男だった。

黒い頬かむりから覗く肌は白く透き通り、歌舞伎役者のような整った顔立ちをしていたが、その目は細く鋭く光り、覗き見た者の心を凍らせる冷たさがあった。

昼間は商いや物見遊山の人々で賑わう両国広小路に向かうこの通りも、今は夜鷹相手の振売りの姿も途絶え、闇と同様深い静寂が支配していた。

夜回りの拍子木の音が遠のくと、男は鳶口のような道具を使い、音も無く池田屋の塀を乗り越えた。

男は跪くように身をかがめ、植え込みに身を隠しながら通り庭を抜け、母屋の裏に建つ蔵へと向かった。

蔵の角に辿り着くと、男は用心深く辺りの様子を伺った。

屋敷内は深い静寂に包まれ、起きている者の気配は全く無かった。

男は蔵の扉の前に立つと、懐から布にくるんだ道具を取り出し、足元に手際よく広げた。

漆喰造りの蔵の扉は、外側から『夜戸』『外戸』『昼戸』の三重の造りで、厳重に守られていた。

『夜戸』は蔵の外壁と同じく分厚い漆喰で塗り固められ、大火にも耐えられる造りになっていた。

『夜戸』を封じている三寸角の頑丈な門には、大人の頭ほどもある土佐錠が掛けられていた。

日本刀と同じ上質の玉鋼で作られ、女肌のような艶を持った見事な土佐錠に、男は暫し見蕩れた。

男は足元に広げた道具の中から、簪の先にひねりを加えたような棒を二本取り上げると、一本は口に銜え、もう一本を正面の鍵穴に差し込んだ。

棒の先端を微妙に捻りながら錠前内部の板刳を押し広げ、口に銜えていたもう一本も鍵穴に差し込んだ。

鍵穴に差し込んだ二本の棒を同時に回すと、「カチッ」という手応えと共に土佐錠は呆気無く開いた。

男は五貫はあろう土佐錠と門を、華奢な体にもかかわらず軽々と持ち上げ、蔵の角に下ろした。

瓢箪に入れて持って来た行灯の油を扉の蝶番に差し、分厚く重い『夜戸』を音を立てぬよう慎重に引き開けた。

次に現れた『外戸』は堅木の樫で頑丈に作られた扉で、家紋をあしらった豪華な装飾が施されていた。

扉の中央には、工芸品のような美しさを持った箱型の海老錠が掛けられていた。

男は先端がコの字型になっている棒を右側面の鍵穴に差し込み、捻りながら引くと錠前の内部がそっくり引き出されるようにして開いた。

最後の『昼戸』は、工作中頻繁に開け閉めする為、本来鍵もかけない軽い格子戸だが、何故か小さな根付けのような錠前が取り付けられてあった。

錠前など外さなくとも、一蹴りすれば簡単に壊すことのできる扉なのだが、男は初めて見る小さな錠前に魅せられたように見入っていた。

その小さな錠前は名のある鍵師によって作られたらしく、表面には梅の花と鶯の見事な彫刻が施されていた。

それと驚くべき事に、この錠前には鍵穴らしきものが何処にも無かった。

「参ったな・・・こんな錠前は初めてだ」

参ったなどと口にした割には、男の顔には嬉しそうな笑が浮かんでいた。

男は錠前の表面を指先でなぞり、動きそうな部分を探した。

錠前の側面に力を加えてみると、わずかに隙間が出来た。

その隙間に針を差し込み探してみたが、これといった手応えは無かった。

道具を変え色々試してみたが、開けるどころか隙間を広げることすら出来なかった。

無心に錠前を弄る男の耳に、日本橋本石町で鳴らされる時の鐘の音が聞こえて来た。

暁七つ、使用人が朝餉の支度に起き出す時刻になろうとしていた。

「ここまでか・・・」

男は残念そうに呟くと、闇の中に溶け込むように姿を消した。

鍵を銜えた狐

江戸の町を散策していると、そこかしこでお稲荷さまに行き会う。

「喧嘩と火事は江戸の華」と語られるように、江戸の町は頻繁に大火に見舞われていた。

火伏せの守り本尊であるお稲荷さまは、火難より町を守りたいと願う江戸町民の手により町の辻々に建立され祀られていた。

稲荷神社の入口には、狛犬の代わりに対の狐の石像が置かれ、口にはそれぞれ宝玉と鍵を銜えていた。

お稲荷さまが口に銜える宝玉は五穀豊穡の神を、鍵は神を祀る蔵を開く鍵を象徴していた。

日本橋界限ではここ数年、大店の蔵を荒らす盗賊が出没し、江戸雀の間で格好の話のタネになっていた。

この盗賊は人を殺めたり屋敷を壊すなどの荒事は決して行わず、嚴重に鍵の掛けられた蔵の扉を事も無げに開ける仕業から、鍵を銜えたお稲荷さまをなぞり何時からか『野狐』と呼ばれるようになった。

南本所花町長屋の共同洗い場は、朝餉の後片付けで集まって来た、長屋の女将さん達の賑やかな笑い声で溢れていた。

「おや佐吉さん、これから仕事かい？」

佐吉と呼ばれた若い男は櫛職人を生業とし、三年程前からこの長屋で暮らしていた。

若い男は色白で切れ長の目に歌舞伎役者のような整った顔立ちで、落ち着いた色合いの江戸小紋の着物を粋に着こなし、風呂敷に包んだ小さな箱を背負って戸口から現れた。

「へえ、日本橋の池田屋さんに頼まれた小間物を、これからお届けに伺うところです」

「日本橋の池田屋と言えば、江戸で一、二を争う大店じゃないか。 佐吉さん大したものだねえ、そんな大店からお呼びが掛るなんてさ」

「これもひとえに御鼻肩を頂いている皆様のお陰です。 さもなければ田舎者の私なぞ、歯牙にもかけて頂けなかったでしょう。 すみません、お茶でも飲みながら四方山話に花を咲かせたいところですが、池田屋さんもお忙しい中待っておられると思いますので、これで失礼します」

佐吉はにっこりと微笑み、長屋の女将さん達に軽く会釈をすると、表の木戸へと向かった。

「佐吉さんは、ほんにいい男だねえ。 簪職人としての腕も一流だけど、腰が低くて礼儀正しいし、どこぞの大店の手代をしてたとしてもおかしくないよね」

「まったくだよ、こんな長屋で燻っているなんて、もったいない話さね。 まあ、あたしらにとっちゃ、いい男を毎日拝めて眼福だけどさ」

「ああ、あたしも後十も若けりゃ、ほっときゃしなかったのにさ」

「三十若けりゃだろ」

「三十？ それじゃ、あたしゃまだ生まれていないよ」

「馬鹿だねえ。 だから、そんだけ望みが無いって話だよ」

「佐吉」

長屋の木戸を潜った所で、佐吉は無精髭を生やした色黒の小柄な男に呼び止められた。

「これは黒田の親分さん、見回りでございますか？」

「まあ、そんなとこさね。 ところで佐吉、これからどこへ出張るんだ？」

「へえ、日本橋の池田屋さんへ」

「ほう、池田屋ねえ・・・」

黒田の親分と呼ばれた岡っ引きは、すうっと目を細めた。

「池田屋と言えよ、表沙汰にはなってねえが二日前に押し込みがあったそうだ。蔵の扉には名のある鍵師に作らせた自慢の錠前が掛けてあったそうだが、その扉が厠の戸みたいに、いともたやすく開けられていたそうだ。ところがおかしなことによ、女子供でも一蹴りすりゃ容易く壊れる格子戸を残して、何も取らずに立ち去っていやがる。目の前には金子や高価な品が喰るようであったにも拘わらずにだぜ。なあ、何でだと思う？」

「さあ・・・私にはさっぱり・・・」

「手口からして昨今、江戸の商家を荒らし回っている盗賊『野弧』に間違いないと俺は睨んでいるんだがな。池田屋は何も盗られてねえし、何より大店の信用に傷が付くような事は避けてえから、引き合いを抜いて内分で済ませる心づもりだろうよ。おめえさんは、いつから池田屋に出入りするようになったんだい？」

「へえ、三月ほど前からですか。何かと御贔屓を頂いている小間物屋の菊屋さんの御紹介で、出入りさせて頂いております」

「そうかい・・・ところで話は変わるが、おめえさん、王子におっかさんがいたよな。胸を患い長く床に臥せっていると聞いたが、櫛職人の稼ぎだけじゃ、高値な薬代は払えないんじゃないのかい？」

「お陰様で仕事もそこそこ頂いておりますし、菊屋さんの所で背負小間物もさせて頂いておりますので・・・楽ではありませんが、切り詰めて何とか凌いでおります」

「そいつあ若いのに感心なこった、おっかさんを大切にしてくれやんな。近いうちに池田屋にも寄らせてもらうよ」

「へえ、伝えておきます。先を急ぎますので、親分さんこれで失礼します」

深々と頭を下げた後、足早に立ち去る佐吉の後ろ姿を、鋭い目付きで見つめながら黒田は呟いた。

「一分の隙もない、食えねえ野郎だ。だが野弧さんよ、その尻尾を必ず捕まえさせてもらうぜ」

天正八年、徳川家康が豊臣秀吉より関八州を与えられ江戸に入府した当時、この地は川や沼が深く入り組み「空より広き 武蔵野の原」と歌われたほど、葦が深々と生い茂る原野が広がる寂れた土地だった。

また当時の江戸は桜田、日比谷辺りまで海が入り込み、日比谷入江と呼ばれていた。

慶長八年、右大臣征夷大將軍に任ぜられた家康は、全国に大号令を発し、大規模な江戸城下町の普請を開始した。

各地から集まった膨大な数の役夫を使い神田山を切り崩すと、その土砂で日比谷入江を埋め立て、次々と町家を造っていった。

そして江戸城を中心とした水路を環状に巡らして整備し、船での物資の運搬を容易にした。

上方より菱垣廻船や樽廻船で運ばれてきた、油、醤油、砂糖、鰹節、紙、薬種、木綿、酒などの生活物資は、隅田川の永代橋の手前で瀬取り船に積み替えられ、江戸の町に無数に枝分かれした水路を使い運ばれた。

こうして江戸は、物流と商業の拠点として発展し、当時世界で最も大きな都市へと成長した。

江戸で一、二を争う廻船問屋『池田屋』は、日本橋から十軒店本石町に向かう通り沿いに店を構えていた。

店の裏手にある船着場には瀬取り船が横付けされ、上方より運ばれて来た大量の品々を、上半身裸の人足達が体から湯気を上げながら荷揚げしていた。

店先には商品を山積みにした荷車がずらりと並び、店内は手代や仲買人でごった返し、喧騒と活気に溢れていた。

「御免なすって、花町の佐吉です。頼まれてました小間物をお持ちしました」

帳場の奥から大番頭の平蔵が、大福帳を片手に和かに微笑みながら出てきた。

「よくおいでだね佐吉さん、大旦那様と女将さんがお待ちかねだよ。 定吉、佐吉さんを母屋の奥座敷へご案内しておくれ」

「あの・・・何か不手際がありましたでしょうか？」

佐吉は眉を曇らせながら、大番頭の平蔵に問いかけた。

これまで商品と代金の受け渡しは帳場で行われるのが常であり、簪職人風情が大店の奥座敷に呼ばれるなどとはまず無い事だった。

それにいつも対応するのは手代さんで、店を一手に預かる大番頭が直々に出て来るとは余程の事である。

「はっはっはっ、佐吉さん、気の回し過ぎだよ。 何も取って喰おうという魂胆じゃないよ。 どちらかと言えば、佐吉さんにとっては良い話が聞けると思うがね」

小僧さんに案内され奥座敷の前まで来ると、佐吉は襖の前で正座し「失礼します」と中に声を掛けた。

襖を身幅分引き開けると膝行して座敷に入り、綺麗な所作で襖を閉めた。

座敷では活花模様の屏風を背にして、池田屋の大旦那勘兵衛と女将のお菊、そして末娘の小春が火鉢を囲んで座っていた。

佐吉は勧められた座布団には座らず、下座側で両手をついて挨拶をした。

「佐吉さん、そんなに鯨張らなくてもいいんだよ。 我が家とまでは言わないが、楽にしておくれ。 今日お前さんに御足労願ったのは、ちょいと相談事があっての事でね。 うちをご覧の通りの廻船問屋だけど、どういう訳か末娘の小春が小間物屋を始めたいと言い出したんだよ。 私は若い娘らしく、習い事でもしていなさいと言って聞かせたんだけど、頑として譲りやしない。 商人の血なのかね・・・そこで懇意にしている小間物屋の菊屋さんに相談したら、お前さん

を紹介されたと言う事の次第なのさ」

「旦那様、私は仕事を頂いている菊屋さんのお手伝いで背負小間物をしておりますが、本来は簪職人でして商家に奉公に上がった事など一度もありません。到底お役に立てるとは思えませんが・・・」

「いやいや、ここ数箇月お前さんの働きぶりを見させてもらったが、なかなかどうして、商人としての素地はしっかりあるよ。帳面はうちの手代を一人付けるから、追い追い覚えればよろしい。人当たりの良さや実直さ、そんなお前さんの押し出しの良さは小間物屋に打って付けだよ」

小春がお茶と菓子を勧めると、佐吉は頭を下げ礼を述べた。

「それから気を悪くしないで聞いて欲しいのだが、お前さんの身の回りを少し調べさせてもらったよ。簪職人をしていた親父さんが、三年前に流行り病で亡くなった事。王子に病気のお袋さんがいて、高値な薬代を稼ぐ為にこっちに出てきた事。菊屋さんは勿論の事、お前さんの住んでいる長屋の大屋さんや店子さん達にも話を聞いたが、みんな異口同音、お前さんは親孝行の働き者だとべた褒めだったよ。どうだい、一つうちで働いてみないかい？」

「身に余る有り難いお話ですが、菊屋さんには困っていた時に助けて頂いた恩義があります。菊屋さんから離れる上に商売敵に成るなど、恩を仇で返すような真似は出来ません。申し訳ありませんがこのお話、お断りさせていただきます」

佐吉が両手をついて深々と頭を下げると、女将のお菊は笑い出しそうになるのを堪えながら口を開いた。

「全くお前さんは噂にたがわぬ、馬鹿正直な人だねえ。うちだって菊屋さんとは長い付き合いだから、不義理な事は出来やしないよ。もちろん菊屋さんには話を通して快諾を頂いているよ。それに新しく開く小間物屋には菊屋さんの商品も並べるから、これは菊屋さんにとっても悪い話ではないって事だよ。そうそう、菊屋さんからも、お前さんの事をくれぐれもよろしくお願ひしますと、頭を下げられている次第さ。まあ、今直ぐに返事をしろと言うのも酷だから、今日のところは話を持ち帰り、じっくりと考えとくれ」

これまで大人しく話を聞いていた小春が、しびれを切らして口を挟んできた。

「おとっつあん、おっかさん、もういいでしょ？ 佐吉さん、この後何か約束があるの？」

「いえ、特には・・・」

「だったら、これから浅草猿若町にお芝居を見に行くから、お供をして頂戴」

「これ小春、いきなりよそ様にお供だなどとは、失礼だよ」

「え～、だって佐吉さんはうちの手代になるんだから、もうよそ様じゃないでしょ？ それより早く行かないとお芝居がはねてしまう」

「全く、しょうがない子だねえ。 佐吉さん、すまないが小春のお守をしてくれるかい？」

「へえ、私でよろしければ・・・」

芝居見物をする狐

天保十二年、老中水野忠邦が推し進めた「天保の改革」は、「享保の改革」「寛政の改革」と並んで江戸三大改革の一つに数えられるが、江戸町民には最も評判の悪い改革であった。

江戸町民のささやかな楽しみであった寄席や歌舞伎、人情本や絵草紙、果ては雛人形や菓子に至るまで、質素儉約、奢侈禁止を強要し、衣食住の全てにおいて微に入り細を穿つ生活統制が行われた。

また「天保の改革」の風俗取締りの名目により、堺町で櫓を上げていた歌舞伎の芝居小屋や芝居関係者の住居、芝居茶屋は全て町外れの浅草猿若町に移転させられ出入りが規制された。

しかし浅草寺参詣の客が芝居見物のかねてこの地に足を運ぶようになり、歌舞伎はかつてない盛況をみせ、浅草猿若町は江戸随一の娯楽の場へと発展した。

浅草猿若町は一丁目から三丁目まであり、一丁目は中村座、二丁目は市村座、そして三丁目は守田座が櫓を上げていた。

そして市村座では、昨今江戸の町を騒がせている盗賊『野弧』を題目にした芝居が掛かり、連日立ち見客が出るほどの人気を博していた。

内容は盗賊『野弧』と町娘の悲恋物語で、盗んだ金子を独り占めしようとする盗賊仲間の裏切りで、町方に追われる羽目になった野弧。 追い詰められた野弧と町娘は、御用提灯に囲まれる中、手と手を細紐でしっかり結ぶと、来世で添い遂げようと誓い合い、両国橋より身投げし果てるという話だった。

万雷の拍手と大向うの掛け声が響く中幕は引かれ、桝席の客は半畳を抱えるとざわざわと鼠木戸へ向かった。

棧敷席では小春がまだ余韻に浸り、赤くした目を袖で押さえつつ鼻をぐすぐすとさせていた。

「いいお芝居だったわね、佐吉さん。 ああ、本物の『野弧』もこんなにいい男なのかしら・・・

・だったら一目会ってみたいわ」

「本物の『野弧』がいい男かどうかは知りませんが、こんな間抜けではないと思いますよ」

「間抜け？」

「へえ、盗みに入った先々で、顔を人前に晒し大見得を切っていたら、面が割れて直ぐに捕まってしまう。それに、足手まといな女など連れていたら、両手両足を紐で縛られているようなもの、逃げ切れる訳がありません。縛られると言えば、橋から飛び降りて逃げるときに、何で女と手を縛り合っていたのか・・・そんな事をしたら泳ぎの達者な私でも溺れてしまいますよ」

「佐吉さん・・・それ冗談よね？」

「何がでしょうか？ ああ、それと千両箱を盗む盗賊などいませんよ、本物は重すぎて担げないですし、両替するとき足がついてしまいます。それに・・・」

「佐吉さん、もうやめて！ 折角のいいお芝居が台無しよ！ ああ、佐吉さんがどんな人か何となく分かったような気がするわ」

「お嬢様、何か不作法があったのでしょうか？」 佐吉は怪訝な顔をして、小春に問い掛けた。

「ぷっ、もう佐吉さん、可笑しすぎ！ ふっふっふっ、黙っていれば、すれ違う女が皆振り返る程いい男なのに」

笑いすぎてお腹が痛いと言いながら、小春は膝に乗せていた十六菊文様の巾着袋の中から紙入れを取り出し涙を拭いた。

小春が取り出した紙入れに結び付けられていた、小さな根付けのような物を見て佐吉は驚いた。

「お嬢様、その紙入れに付いているのは・・・」

「えっ、これ？ 蔵の扉に付いていたからくり錠だけど、可愛いから貰っちゃった。これがどうかしたの？」

「ああ・・・いえ、珍しい錠前だなと思ひまして」

「これはね、おとっつあんの知り合いの鍵師が、お遊びで作ったからくり錠なの。見てて、開けるのに鍵はいらないのよ。ここを引っ張るでしょ・・・そしてここを捻ると・・・ここが開いて・・・もう一度捻ると・・・ほら、外れた」

佐吉は手渡されたからくり錠を、暫し呆然と見つめていたが「はっはっはっ」と、心底可笑しそうに笑い出した。

「佐吉さんて、本当に変な人」 小春もつられて笑い出した。

廻船問屋『池田屋』の末娘小春のわがままで、一年ほど前より商いを始めた小間物屋『かわせみ』は慌ただしい年の瀬を迎えていた。

池田屋からさほど離れていない本石町に借りた間口二間の小さな店は、小春が自分の目で選んだ白粉、紅猪口などの化粧品を始め、鹿子、刷毛、かもじ、袋物、そして佐吉の作る見事な簪や櫛が、店内を華やかに飾るように並べられていた。

新しい物、可愛らしい物好きな江戸の町娘達の間で人気となり、小間物屋『かわせみ』は予想以上に繁盛していた。

最後の客を見送り表に出た小春が、暖簾を抱えて店内に戻ってきた。

「冷えてきたわね、雪でも降るんじゃないかしら。二人とも、今日はもう終いにしましょう」

帳場では手代の信八郎と佐吉が、今日の売上を勘定し大福帳に記入していた。

「お嬢様、佐吉さん、では私は先に上がらせて頂きます」

池田屋に住み込みで働いている信八郎は、二人に挨拶をすると売上と大福帳を抱え、一足先に池田屋へ帰って行った。

「佐吉さん、うちに寄って夕餉を済ませていく？」

お店の片付けを終わらせた小春が佐吉に声を掛けた。

「お嬢様、作りかけの花簪を仕上げたいので、今夜はご遠慮させて頂きます」

「もう！二人で居る時は『お嬢様』はやめてと言ってるでしょ！」

小春はぷうっと可愛く膨れてみせた。

「すみません、お嬢様、あ……」

「ふふふ、もういいわ、しょうがない人ね。あまり無理しないでね」

小春は佐吉の手にそっと触れ、微笑みながら店を後にした。

佐吉は幸せな心持ちで小春の後ろ姿を見送ると、仕事用の座卓に向かい桐の箱から作りかけの花簪を取り出した。

「ごめんよ、佐吉はいるかい」

声の響いた店の入口に目を向けると、そこには岡っ引きの黒田が立っていた。

「池田屋に行ったら、おめえさんがまだこっちに居ると聞いたもんでな」

「これは親分さん、寒い中お勤めご苦労様です。今お茶をお入れしますので、どうぞ中に入って火鉢にでも当たって居て下さい」

「そうさせてもらうよ。ううう……今日はやけに冷えやがる、古傷が痛んでしょうがねえや、雪でも降るんじゃねえだろうな。こんな時間になっても仕事とは、景気がよさそうだな」

「お陰様で、今年も何とか年を越せそうです」

「そうかい、そいつは良かった。こっちはこの所、捕まるのは巾着切とか置き引きとかのケチな盗人ばかりで、肝心の『野弧』は一年前の池田屋を最後にピタリと鳴りを潜めちまってさっぱりさね」

黒田は上がり框に腰を下ろすと、腰に下げていたカマスから煙管を取り出し、雁首に刻み煙草を丸めて詰め、火鉢に顔を寄せ火を付けるとぷかりと一服くゆらせた。

「ところが最近、奴が初めて盗みを働いたと思われる王子の米問屋に辿り着いたんだよ。手口からして『野弧』に間違いねえんだが、なんと奴さん厠に起きてきた家の者に顔を見られるドジ踏んでいやがった。それで近々、絵師を連れて王子へ出張り、人相書を作る事にしたんだよ。

これで奴も芝居の『野弧』みたいに、追い詰められるてえ訳だ。人相書が出来たら、ここと池田屋にも貼らせてもらうよ。そういや、おめえさんも王子の出身だったよな……」

黒田は探るような鋭い目付きで佐吉を見詰めたが、能面のように無表情な佐吉の顔からは、何も読み取ることが出来なかった。

「おっといけねえ、まだ寄らねえといけない所があったんだ。 仕事の手を止めちまって悪かったな、それじゃ失礼するよ」

「いえ、大したお構いも出来ず済みませんでした。 足元に気を付けてお帰り下さい」

背中を丸めて店を出ていく黒田の後ろ姿を、佐吉は厳しい目付きで見送った。

年が明けると江戸の町は、年の瀬の風雪混じりの荒れた天気とは打って変わり、暖かく穏やかな新年を迎えていた。

江戸でも有数の廻船問屋『池田屋』には、修行で上方の廻船問屋に手代として奉公に上がってる跡取り息子の宗一郎と、品川町の呉服屋に嫁いだ長女のお絹が、辰之助、お千代の二人の子供を連れて里帰りしており、賑やかな正月を迎えていた。

母屋の奥座敷には御節の膳が並び、久しぶりに揃った池田屋の親族の席に佐吉も加わっていた。

「佐吉さん、それはどういう事だい？ 小春に何か問題でも有ると言うのかい？」

池田屋の大旦那勘兵衛は、語気を荒らげて佐吉を問い質した。

「いえ、決してそのような事は・・・ただ、私には過ぎた話かと・・・」

やっとの事でこれだけを言葉にすると、佐吉は下を向き黙り込んでしまった。

顔を真っ赤にして俯き、触れれば今にも泣き出してしまいそうな小春を目の端に留めると、母親のお菊は小さく溜息をつき口を開いた。

「あなた、落ち着いて下さいな。佐吉さんは小春のことを嫌いだなんて、一言だって言っちゃいませんよ。二人の気持ちを確認もせず、いきなり婚礼だなんて先走るからこんな事になっちゃうですよ。全く男って生き物は、どうしてこうもせっかちに出来ているんだろうね。春になれば必ず梅の蕾が綻ぶように、男女の仲も時期が来れば落ち着く先に落ち着くものなのさ。

佐吉さん済まなかったねえ、只ちよいと気になっている事があるんだけど・・・去年の暮れ頃から少し様子が変に思えたけど、何か心配事でもあるんじゃないのかい？」

お菊は伊達や酔狂で大店の女将をしている訳ではない、日頃から周りの人々をよく観ていて気配りを欠かさなかった。

「いえ、特には・・・」

「まあ、まあ、まあ、佐吉さんはこれだけの色男なんだから、世間の若い娘達が放って置く訳がないって事さね。男なら人には言えない秘密の一つや二つ、在って当然、聞かぬが華、てね」

長男の宗一郎が訳知り顔で話に割り込み、ニヤリと笑った。

「お前は黙っておいで！話をややこしくするんじゃないよっ！」

お菊に一喝され、妹の小春にもキッと睨まれた。

「おお、怖っ・・・」宗一郎は首を縮め、ぺろっと舌を出した。

「それよりも、上方から持ち帰った珍しい品があるんだけど、皆んな箸を置いてちょっと帳場まで来てくれるかい？」

宗一郎なりに剣呑な場の空気を和らげようと気配りをしての事らしく、皆も宗一郎の話に乗り立ち上がると、わらわらと帳場へ向かった。

帳場の隅には麻布に包まれた大きな荷物が置かれていて、麻布を取り外すと中から鈍く黒光りする船筆筒が姿を現した。

「この船筆筒はね、南蛮渡来の大層珍しい品なんだよ。お江戸では『野弧』という盗賊が商家を荒し回っていて、まだ捕まっていないそうだね。うちの蔵に忍び込んだ盗賊も『野弧』だったとか、でもこの船筆筒は絶対破られないね。なにせ、今までの和錠とは全く造りが異なるからね」

宗一郎は得意げに、南蛮渡来の船筆筒の説明を始めた。

普通ならば樗や柘の木で作られるが、この船筆筒は黒鋼で造られていた。

高さは五尺もあり、大人でも身を屈めれば入れるほどの広さがあった。

扉には、これまでに見た事もない錠前が埋め込まれていた。

宗一郎は数字の刻まれた丸いギボシのような突起物を右左に回して、錠の仕組みを佐吉に熱心に語って聞かせた。

佐吉は感心しながらも、さほど理解している風でもなく宗一郎の話を聞いていた。

大人達の話に飽いた辰之助とお千代は、船筆筒を出たり入ったりして遊び始めていた。

「邪魔するよ」

声のした方を見遣ると、岡っ引きの黒田が厳しい顔つきで店の入口に立っていた。

「これは黒田の親分さん、新年おめでとうございます。近頃はすっかりお見限りでしたが『野弧』でも現れましたか？」

勘兵衛は黒田を店内に招き入れ、座布団を勧めた。

「今日は佐吉に用があつてね」

黒田は佐吉に鋭い目を向けた。

佐吉は唇を噛みしめ、ついに来るべき時が来たと覚悟を決めた。

「佐吉さんに？ それは珍しい、何でまた・・・」

「ああっ！ お千代！」

小春の姉お絹の叫び声に、帳場にいた者たちが一斉に振り返った。

「どうした?!」

「お千代が、中に！」

お絹は真っ青な顔で、船筆筒の扉を開けようとしていた。

船筆筒の傍らでは、辰之助が呆然と立ち尽くしていた。

どうやら、子供二人で船筆筒に入って遊んでいるうちに、お千代を中に入れたまま扉を閉じてしまったようだ。

「どきなさい！」

総一郎はお絹を押しよけると、取手に手をかけ開けようとしたが、扉はびくともしなかった。

「早く開けて！ 早く！」

「分かっている！・・・開かない！・・・ああ、南無三・・・鍵と数字合せの覚書の中に入れたままだ・・・」

「お千代！ お千代！ お千代！」

お絹は気が狂れたかのように、両拳で船筆筒を叩き泣き叫んだ。

「お絹、静かにおし！」

勘兵衛が船筆筒に耳をあてると、お千代の泣き声が微かに聞こえてきた。

「信八郎、よ組の頭取の所へ行って、火消し人足と船筆筒を壊せそうな道具を借りてきておくれ！」

「へい！」

手代の信八郎は裸足のまま、弾かれたように表通りへ駆け出して行った。

他の者達は近所の大工の棟梁から借り受けた、金槌、のみ、手斧で扉を壊そうとしたが、黒鋼で出来ている船筆筒には、全く歯が立たなかった。

勘兵衛が再び船筆筒に耳を当てると、お千代の泣き声が聞こえなくなっていた。

「まずいな・・・信八郎が首尾良く事を運んでいたとしても、戻って来るまでには半時は掛かるか・・・」

勘兵衛の顔に、焦りと苦悩の色が浮かんだ。

「お千代が死んでしまう・・・ううう・・・誰か助けて・・・」

お絹はその場に立っている事が出来なくなり、母親のお菊の膝に泣き崩れた。

「佐吉さん、お千代ちゃんを助けて！」

小春は自分の愛する人ならば、必ず何とか出来るという確信に満ちた目で、佐吉を真っ直ぐに見つめた。

これまで事の成り行きを、人垣の後ろから厳しい顔つきで見つめていた佐吉だったが、小春に向き直るとにっこりと微笑んだ。

「小春さん、その髪に付けている簪をお貸し下さい」

「えっ？ 簪？」

小春は可愛らしい銀製の葵簪を、髪から外すと佐吉に手渡した。

佐吉は簪を受け取ると、人垣を掻き分け船筆筒の前に出た。

「皆さん、下がってもらえますか」

「佐吉さん、いったい何をやる気だい？」

勘兵衛が訝しげに尋ねると、佐吉は微笑みながら「すぐに終わります」とだけ答えた。

小春から受け取った簪を口に銜えると、佐吉の顔からは人懐っこい笑は消え、『野狐』の細く鋭い目付きへと変わった。

黒鋼のひんやりとした扉に耳を当てると、佐吉は指先の感覚と音に全ての意識を集中し、丸いギボシ状の突起物を右左にカラカラと回し始めた。

佐吉の白く長い指が小刻みに動き続け、水を打ったように静まり返った帳場に「カチッ」と小さいが鋭い音が響いた。

佐吉は口に銜えていた簪を手に持ち替えると、鍵穴に差し込み慎重に内部を探った。

櫛の先端を鍵穴を使って曲げ、鍵穴に差し込み捻るという動作を何度か繰り返すと、佐吉の手の動きがぴたりと止まった。

簪を握った右手はそのままに、左手で扉の取っ手をゆっくりと引くと、船筆笥の重く分厚い扉が音も無く開いた。

「おおーっ！」

帳場で固唾を飲み見守っていた人々の間から、歓喜の声が沸き上がった。

「お千代！ 水だっ！ 誰か水を持ってきておくれ！」

お千代はぐったりとしていたが意識はあり、抱きかかえる勘兵衛の腕から母親の姿を見つけると、泣きながら小さな手を伸ばした。

小春もお千代の元へ駆け寄り、袖で涙を拭きながら家族皆と無事を喜んだ。

佐吉は喜びに沸く人々にそっと背を向けると、少し離れた所で腕を組んで立っていた岡っ引きの黒田の元に歩み寄り、両腕を前に出した。

「黒田の親分、行きましょうか」

「行くって、何処へだい？」

「・・・出来れば、池田屋の皆さんに気付かれないよう番所へ・・・」

「番所なあ？ 何でだい？ 佐吉よ、遠慮深いにも程があるぜ。池田屋さんが孫娘の命の恩人を何のお礼もせず帰すと思うかい？ そんな事したら日本橋で代々暖簾を守ってきた大店の名折れってえもんだよ。まあ、大店の面子がどうのとか関係無く、池田屋さんはおめえさんを心から歓待するだろうけどよ。ほら、小春ちゃんがこっちを見てるぜ、早く傍に行ってあげな」

小春は薄紅色に頬を上気させ、誇らしげに佐吉を見つめていた。

「でも黒田の親分、私は・・・」

「でもも、へちまもねえよ！ 俺は忙しいからこれで失礼するぜ。佐吉、小春ちゃんと王子

のおっかさんを大切にしなよ」

黒田は佐吉の背中をぽんと軽く叩くと、暖簾を勢いよく跳ね上げ表へと出ていった。

お天道様は西に大きく傾き、江戸の町を茜色に染め始めていたが、両国広小路は初詣や年始の御挨拶回りから帰る華やかな装いの人々で込み合っていた。

芸者の置屋からは三味線の音がゆるく響き、小料理屋や旅籠の行灯にぽつぽつと火が灯され始めていた。

人混みに押され流されるように両国橋の袂まで来ると、隅田川を渡る冷たい空っ風に黒田は思わず身震いをした。

鼻をすすり襟を正すと、懐に仕舞っていた人相書が指先に触れた。

取り出して眺めると、歌舞伎役者のような端正な顔立ちに、細く鋭い目の若い男が描かれていた。

「よく描かれていやがる・・・生き写しだね」

黒田はその人相書で鼻をかむと、くしゃくしゃと丸め隅田川にポイと投げ捨てた。

「追い詰めはしたものの 芝居のようには行かなんだ～ 情にほだされ 搦んだ尻尾を手放した～ 両国橋より身を投げるは何故か丸めた鼻紙 本物の野弧の方が役者が一枚上だったとさ・・・」

黒田は戯言を小唄のように呟きながら、背中を丸め両国橋を渡って行った。

完